

日本人女子中高生と女子大学生のライフスクリプトに関する検討

川崎 采香*

Cultural life scripts of Japanese female adolescents and young adults

KAWASAKI Ayaka

Abstract

A life script is “a series of events that takes place in a specific order and represents a prototypical life course within a certain culture (Rubin & Berntsen, 2003, p.2)”. A life script is influenced by culture and develops from adolescence to early adulthood. In this study, female Japanese junior high school, high school, and undergraduate students were asked to describe life scripts by listing the 10 most important events for a prototypical girl. Some categories identified in our study, but not in previous studies, included the high school entrance exam, falling out, Seijinshiki ceremony, and club activities. These life script events reflect Japanese culture and the Japanese educational system. A bump was observed for positive and mixed valence (positive and negative) events, and for negative events in adolescence and young adulthood. Life scripts have been thought to contain many positive events and few negative or mixed valence events, but this study failed to show this tendency. The present study showed that features related to valence vary by culture. The results also indicate that undergraduate students described more typical life scripts than junior high school or high school students, which supported previous studies.

Keywords : life scripts, culture, Japanese, adolescence, young adulthood

1. 問題と目的

私たちは、日常的に社会と関わり様々な出来事を経験している。出来事は些細なものから、人生を変えるようなものまで、無数にある。そして、特に自身にとって重要な出来事を経験するとき、出来事を経験そのものや、出来事から導かれた自分の行動の正誤を判断するために、社会の中で共有されている規範や考えを参照する。Berntsen & Rubin (2002), Rubin & Berntsen (2003) は、「文化的に共有された、典型的な人生のライフイベントに関する知識」を、ライフスクリプトと定義した。また、ライフスクリプトに含まれる出来事の内容と、それが経験されると考えられる年齢に関する知識は同時に獲得される (Bohn & Berntsen, 2008) ことから、ライフスクリプトは自身の経験とは切り離された知識であると当該領域で考えられている。さらに、ライフスクリプトの特徴として、①出来事の多くがポジティブ感情を含むこと、②ポジティブ感情を伴う出来事の多くが30歳までの時期（特に15-30歳）に経験すると予想されること、③ネガティブ感情、ニュートラル感情を伴う出来事は特定の時期に集中して経験すると予想されにくいことが、多くの先行研究より示され (Berntsen & Rubin, 2004; Coleman, 2014; Erdoğan, Baran, Avlar, Taş & Tekcan, 2008; Janssen & Haque, 2018; Ottsen & Berntsen, 2014;

キーワード：ライフスクリプト、文化、日本人、思春期、成人期初期

*平成28年度生 人間発達科学専攻

Scherman, Salgado, Shao & Berntsen, 2017他多数)、これらはライフスクリプトの主要な特徴と考えられている。

ライフスクリプトの文化差について

ライフスクリプトは文化の影響を受けて形成されることから、文化差に関する検討も行われている。デンマークとアメリカの比較研究では、教育制度や移動手段としての自動車への需要の違いが、高校や運転免許取得といったライフスクリプトを形成するカテゴリーの有無の違いとして表れていた (Rubin, Berntsen & Hutson, 2009)。また、デンマークとトルコの比較研究から、宗教に関連した特定の出来事 (割礼、兵役、堅信、洗礼) がライフスクリプトの形成に影響することも示されている (Erdoğan et al., 2008)。ただし、Berntsen & Rubin (2004) 以後の研究の多くが、Berntsen & Rubin (2004) 内で示されたカテゴリー 35個を基準にライフスクリプトを分類でき (Bohn, 2010; Bohn & Berntsen, 2008; Coleman, 2014; Rubin et al., 2009; Ottsen & Berntsen, 2014; Scherman et al., 2017)、しかも、新たに一から生成されたライフスクリプトの多くが結局Berntsen & Rubin (2004) のライフスクリプトと一致していた (Erdoğan et al., 2008; Tekcan, Kaya-Kizilöz & Odaman, 2012)。さらに、ライフスクリプトの主要な特徴として考えられている点も異なる文化間で共通していることから、文化差についての検討は詳細にはあまり行われてはおらず、異なる文化間でも比較的共通した出来事や特徴を含むライフスクリプトが形成されると考察されている (Coleman, 2014; Erdoğan et al., 2008; Janssen & Haque, 2018; Rubin et al., 2009他)。ただし、文化差についての検討は一部の国 (デンマーク、トルコ、オランダ、アメリカなど) の中で留まっており、アジアやアフリカを対象とした研究がほとんど行われていない。欧米文化とアジア文化は、宗教や社会の中での常識が根本的に異なることから、文化の影響を受けて形成されるライフスクリプトが、大きく異なる可能性がある。

日本人のライフスクリプトに関する研究として、Janssen, Uemiya & Naka (2014) は、20-80歳の成人男女759名を対象にインターネット調査を行い、日本の成人が形成するライフスクリプトに含まれる出来事は、海外の先行研究とおよそ一致することを示した。しかし、20-80歳までの男女をひとくりにした結果や考察となっており、内容に関する詳細な検討は行われていない。また、多くの先行研究が質問紙を用いて調査している一方、Janssen et al. (2014) の研究はインターネットを用いた調査であり、教示の仕方も異なることから、先行研究と同様の方法を用いたときには異なる結果が得られる可能性も考えられる。なお、日本人を対象としたライフスクリプトに関する研究は、現在調べた限りでは、Janssen et al. (2014) の一件のみであり、日本人が形成するライフスクリプトについては不明な点が多い。

ライフスクリプトの発達過程について

ライフスクリプトは文化の影響を受けることから、生涯に渡って発達、変化すると当該領域では考えられている。Habermas (2007) は、8-12歳の間にライフイベントの名前と予想される年齢についての知識が増加することを示した。Bohn & Berntsen (2008) は、3年生 (M=9.51) と5、6年生 (M=11.87)、8年生 (M=14.46)、大学生 (M=28.33) が回答したライフイベントを比較し、5、6年生では対象者間で比較的共通するライフスクリプトを形成している可能性が示されているものの、8年生でも成人が形成したライフスクリプトとは内容が異なる部分があることを示した。また、Tekcan et al. (2012) は、思春期と青年期初期、老年期のライフスクリプトに含まれる出来事に重なりが多いことを示し、思春期でも社会や文化に沿ったライフスクリプトが形成されている可能性を示唆した。さらに、年代により多少の発達変化は見られるものの、成人期では、異なる世代間でも類似するライフスクリプトを形成し、安定していることが指摘されている (Bohn, 2010; Janssen & Rubin, 2011)。これらの知見から、ライフスクリプトは、児童期もしくは思春期頃から発達し始め、成人期に安定して形成されると考えられている (Berntsen & Rubin, 2004; Bohn & Berntsen, 2008; Habermas, 2007; Habermas & Bluck, 2000; Habermas & Paha, 2001; Rubin & Berntsen, 2003)。

しかし、ライフスクリプト研究の大半が、ライフスクリプトの形成が十分になされていると考えられている成人期初期を対象としており、発達初期と言われている思春期を対象とした調査は数件のみである。日本人の思春期を対象としたライフスクリプト調査は、調べた限りでは一件も行われておらず、発達過程は不明である。

本研究の目的

このような研究背景をふまえ、本研究では、日本人の中高生、大学生を対象にライフスクリプトに関する質問紙調査を行った。本研究の目的は、ライフスクリプトの主要な特徴と考えられている内容が本研究の対象者が形

成するライフスクリプトにおいても見られるかを検討すること、先行研究との比較を通して文化差について、中高生と大学生の比較を通して発達過程について明らかにすることとした。なお、日本では男女間で経験すると予想されるライフイベントの種類や時期が異なる可能性が指摘されており（小坂・柏木, 2007）、男女で形成するライフスクリプトの内容や特徴が異なる可能性が考えられるため、本研究では対象者を女性に限定した。

2. 方法

調査時期

大学生：2013年6月末～10月上旬、中高生：2013年7月上旬から下旬

調査対象

都内の私立女子校に通う12～18歳の中高生157名（平均年齢14.32、標準偏差1.71）

都内の国立女子大学に通う18～28歳の大学生159名（平均年齢20.14、標準偏差1.98）

手続き

表紙に「人生の経験に関する調査」というタイトルと、調査の概要、調査が任意であること、匿名性であることが記入された質問紙が対象者に配布された。教示文は、Berntsen & Rubin (2004) のStudy2内で用いられたものを日本語に翻訳し、一部に変更を加えたものだった（“これから生まれてくる、女の子を想像してください。その子は、特別な境遇にいるのではなくて、ごく一般的な、普通の女の子です。その女の子が、一生の中で経験する出来事のうち、考えられる最も重要な10個の出来事を挙げてください。出来事は頭に思い浮かんだ順番で構いません”）。Berntsen & Rubin (2004) の対象者は大学生のみであり、7個の出来事の想起を求めているが、一方で、幅広い年代（小学生、中高生、成人）を対象としたBohn & Berntsen (2008) では10個の出来事を求めている。よって、本研究ではBohn & Berntsen (2008) に従い、対象者（中高生、大学生）に10個の出来事の想起を求めた。さらに、Berntsen & Rubin (2004) のStudy2を基に、出来事の名前と共に、以下の質問についての回答を求めた。（1）一般度：出来事は、どれくらい一般的なものですか？100人のうち何人が経験するか、予想してください（100人中予想される人数）。（2）重要度：出来事は、どれくらい重要だと思いますか？（1：全く重要ではない－5：かなり重要である）。（3）年齢：出来事は、何歳のときに起こりそうですか？最も考えられる年齢を書いてください（予想される年齢）。（4）感情：出来事を経験したとき、どの感情に最も当てはまりますか？○をつけてください [(肯定的/ポジティブ、否定的/ネガティブ、両方、どちらでもない) から1つ選択]。最後に、対象者の年齢、学年、中学/高校の部活動経験について質問した。調査対象者が中高生を含むことを考慮し、Berntsen & Rubin (2004) とは異なり、（2）重要度を5件法に、（4）感情を4種類からの選択式に変更した。また、（2）重要度への回答をもとめたのは、ライフスクリプトの発達初期であると考えられる中学生を対象としており、教示を理解したうえで答えているかを確かめるためであった。

3. 結果

出来事カテゴリー

記述された出来事と、各カテゴリーに回答した人数の割合、予測した経験年齢の平均値と標準偏差を表1に示す。Berntsen & Rubin (2004) とは異なる文化圏で行われた先行研究 (Erdoğan et al., 2008; Tekcan et al., 2012) では、新規カテゴリー生成基準を対象者の4%以上と設定していたため、本研究内でも4%以上の回答が得られたものを1カテゴリーとした。記述された出来事の中で、4%以上が全く同じ言葉を使用している場合は、それを1カテゴリーと定めた。また、出来事に含まれる言葉に基づいて分類した際に4%未満でも、同じ意味を含むカテゴリーとして集約でき、かつ、それにより4%以上の言及率になる場合は1カテゴリーと定めた。カテゴリーとして集約できず、言及率が4%未満の内容については、すべて「その他」とした。質問形式が自由回答だったことを考慮し、全く同じ単語が含まれていない場合でも、同一の意味を示している場合（“結婚”と“嫁入り”など）は、同じ出来事と判断したが、可能な限り、対象者の多くが共通して記述した出来事名をそのままカテゴリー名として用いるようにした。結果、死に関しては5つのカテゴリー（自身の死、両親の死、家族や親

表1 大学生、中高生が記述したライフスクリプトの出来事と言及頻度(%)、予想した経験年齢の平均値と標準偏差

出来事	大学生 (N=159)			中高生 (N=157)		
	%	出来事の年齢		%	出来事の年齢	
		M	SD		M	SD
結婚	92.45	26.81	2.24	75.16	26.43	2.43
子どもの誕生	79.87	29.50	2.64	53.50	29.05	2.83
恋愛	66.67	13.42	4.12	50.96	13.26	4.99
就職	61.64	22.41	1.24	49.68	23.05	3.31
大学受験	42.14	17.96	0.44	30.57	17.88	0.48
両親の死	37.11	53.16	9.50	12.74	53.05	6.34
小学校入学	25.79	6.12	0.39	24.84	6.31	1.02
高校受験	22.01	15.11	0.32	9.55	14.93	0.44
けんか	18.87	10.10	9.81	26.75	8.36	3.47
けが、病気	17.61	41.92	23.18	16.56	31.52	26.12
退職	14.47	56.29	14.57			
友達ができる	14.47	8.35	6.18	17.20	6.69	5.04
大学入学	13.84	18.27	0.45	13.38	18.05	0.37
旅行	13.84	16.15	7.75	7.01	16.80	9.72
失恋	13.21	15.78	4.01	8.28	16.33	2.54
他者の死	13.21	24.27	15.96	10.19	26.75	18.89
部活動	13.21	14.14	1.88	4.46	13.14	1.25
高校入学	12.58	15.40	0.49	10.83	15.13	0.33
自身の死	12.58	82.80	6.17	26.11	85.66	18.84
初潮	12.58	12.25	1.04	5.73	12.56	0.83
中学校入学	12.58	12.45	0.50	13.38	12.19	0.39
家族、親戚の死	11.95	29.38	15.83	7.01	30.44	18.37
配偶者の死	11.95	78.84	2.03			
成人(式)	11.32	20.00	0.00	5.73	20.00	0.00
就職活動	10.69	21.75	0.90			
他者からの言動	9.43	6.07	7.91	7.01	9.73	6.90
一人暮らし	9.43	19.93	2.35	5.73	20.88	1.83
妊娠	8.18	28.31	2.20	5.10	28.63	2.18
孫の誕生	8.18	62.46	4.16	7.64	58.08	2.90
子どもの結婚	6.92	56.80	3.19			
自身の離婚	6.92	34.82	5.54	9.55	36.54	6.34
アルバイト	6.29	18.30	0.64			
高校卒業	6.29	17.60	0.92	5.10	18.00	0.00
子育て	6.29	31.20	2.23			
子どもの自立	6.29	53.50	3.75			
挫折	6.29	17.40	2.91	4.46	18.50	5.12
介護	5.66	60.00	13.45			
反抗期	5.66	13.67	1.63	7.64	13.42	2.14
(大きな) 買い物	5.03	27.63	10.83			
学校行事	5.03	13.00	4.00	5.10	8.50	4.47
自身の誕生	5.03	0.00	0.00	8.92	0.00	0.00
小学校卒業	5.03	11.88	0.33	5.73	12.11	0.31
引越し、転校	5.03	18.25	12.31			
妹弟の誕生	4.40	3.71	0.70			
失敗	4.40	12.43	9.16			
中学受験	4.40	11.57	0.73	17.83	11.82	0.66
人との出会い	4.40	9.40	7.81			
幼稚園、保育園入園	4.40	3.00	0.53	10.19	3.25	1.03
留学	4.40	20.29	0.88			
大学生その他	118.87	15.56	13.29	98.09	20.08	18.58
大学生のライフスクリプトには含まれず、中高生の4%以上が記述した出来事						
目立つ(スターになる)				9.55	25.60	20.23
いじめ				7.01	11.27	3.44
感情を表す				7.01	5.11	5.40
話し始める				7.01	1.27	1.14
悩む				6.37	13.75	2.73
学生生活				5.73	12.63	4.00
事故				5.73	24.50	9.53
創造物の体験				5.73	13.78	7.13
(友達と)遊ぶ				5.73	7.00	4.69
歩き始める				5.10	1.38	0.48
勉強する				5.10	13.86	17.76
外見の変化				4.46	12.86	8.34
学校へ通う				4.46	11.29	6.13
夢を持つ				4.46	11.67	3.73
中高生その他				41.40	20.85	23.28

戚の死、配偶者の死、他者の死)が、教育に関しては3つのカテゴリー(教育をうける、学校へ通う、勉強する)が生成された。ライフスクリプトが児童期もしくは思春期から発達し、成人期初期に十分な形成が可能になることを考慮し、大学生のカテゴリーを基準とすることにした。始めに、上記の基準に基づき、大学生のカテゴリー生成を行ったところ、最終的に49個のカテゴリーに集約された(その他を除く)。次に、中高生が記述した出来事を大学生の49個のカテゴリーを基に分類したところ、14個は4%に満たなかったためカテゴリーから削除された。大学生の49個のカテゴリーに当てはまらないものについては、同様に上記の基準に基づき、新たなカテゴリー生成を行ったところ、新たなものとして14個が生成された。よって、最終的な中高生のカテゴリー数は49個となった(その他を除く)。

なお、中学生でも教示を明確に理解したうえで回答していたかを確認するため、重要度について5件法での回答を求めているが、中高生、大学生が生成した各カテゴリーの重要度の平均値はいずれも3.00以上で、言及頻度の上位10項目はいずれも4.00以上であったことから、本研究の中高生は、大学生と同様に、十分に教示を理解した上で回答を行っていることが示された。

大学生、中高生の各カテゴリーに従って、記入された出来事を分類した。対象者の1/3については、2名(調査者1名と別の研究者1名)が別々に分類を行った。2名の一致率は98.33%であり、不一致の箇所は協議により解決した。残りの2/3のデータについては、調査者一名が出来事の種類を行った。一人当たりの回答数は、大学生平均9.19個(範囲3-10、標準偏差1.71)と中高生平均8.20個(範囲1-10、標準偏差2.68)だった。

ライフスクリプトの典型性と特異性

Bohn & Berntsen (2008) に従い、2つの基準を用いてライフスクリプトのnormativityを求めるために、典型性得点と特異性得点を算出した。(1) 典型性得点は、全対象者の中でどれくらいの人々が特定の典型的とされる出来事を述べたかを調べるための指標である。例えば、大学生147名が結婚と回答したため、結婚の典型性得点は147点である。同様に、結婚に関する中高生の典型性得点は118名が回答したため、118点となる。典型性得点は、ライフスクリプトのカテゴリー化された出来事のみ得点を示す。また、上記に基づいて、各対象者が回答した出来事の典型性得点の合計がライフスクリプトの典型性得点となる。各対象者が回答した出来事の典型性得点が高いほど、その対象者のライフスクリプトは文化内で典型的なものと言える。(2) 特異性得点は、ライフスクリプト内で回答された特異的な出来事を数えることで、ライフスクリプトの個人の差異を求めるための指標である。Bohn & Berntsen (2008) に従い、中高生のその他項目作成時に、大学生の回答に含まれている出来事だった場合は“大学生その他”、中高生のみが回答した出来事だった場合は“中高生その他”と分類した。Bohn & Berntsen (2008) では、成人のライフスクリプトと比較したときの、子どものライフスクリプトの発達の程度に注目したため、子どものみで生成されたカテゴリーもその他のカテゴリーに分類していた。しかし、本研究では、調査対象者の年齢が近く、両者共にライフスクリプトの発達過程段階である可能性があるため、中高生のみに見られたカテゴリーをその他のカテゴリーへ振り分けなかった。特異性得点を算出する際は、発達差の可能性を考慮しているBohn & Berntsen (2008) に従い、大学生が記述した出来事の中で“その他”に含まれるものを2点、中高生が記述した出来事の中で“大学生その他”に含まれるものを2点、中高生が記述した出来事の中で“中高生その他”に含まれるものを1点とし、各対象者の特異性得点を算出した。本研究の対象者数は、大学生159名、中高生157名とほぼ同数であることから、得点の調整は行わなかった。典型性得点は、大学生 ($M=501.15, SD=136.05$) のほうが中高生 ($M=307.97, SD=134.52$) よりも高かったが [$t(314)=12.69, p<.001$]、特異性得点は、大学生 ($M=1.19, SD=1.41$) のほうが中高生 ($M=2.54, SD=2.51$) よりも低かった [$t(244)=5.9, p<.001$]。

年齢と感情の関係

始めに、出来事を経験すると予想した年齢と感情との関係を大学生と中高生、各々図1と図2に示す。全体の中で、各感情が占める割合は、大学生がポジティブ39.76%、ネガティブ17.21%、両方40.26%、どちらでもない2.77%、中高生がポジティブ41.09%、ネガティブ16.09%、両方34.89%、どちらでもない7.92%であった。言及頻度の山は、大学生 [11-20歳の両方 (17.85%)、21-30歳のポジティブ (15.50%)、11-20歳のネガティブ (5.19%)] と中高生 [11-20歳の両方 (15.28%)、11-20歳のネガティブ (5.56%)] の間で共通の年齢範囲と感情価で見られた。また、中高生のポジティブ感情は0-30歳にかけて比較的高い割合(各年齢範囲で12%前後)であった。

次に、各出来事カテゴリーに伴うと予想する感情に関してカイ二乗検定を行った。22カテゴリーに関しては、

感情間で有意差が見られず、特定の感情を含むカテゴリーと特定できなかった。有意差が見られたカテゴリーに関しては、各感情間で多重比較 (Bonferroni) を行い、具体的にどの感情を有意に高く伴うのかを調べた。

ポジティブ感情が有意に多く選択されたカテゴリーは、結婚 [$\chi^2=167.27, df=3, p<.001$]、子どもの誕生 [$\chi^2=139.93, df=3, p<.001$]、友達ができる [$\chi^2=51.13, df=3, p<.01$]、旅行 [$\chi^2=32.00, df=3, p<.01$]、成人 (式) [$\chi^2=24.89, df=3, p<.01$]、話し始める [$\chi^2=4.46, df=3, p<.01$] の6項目であり、対象者の全員がポジティブ感情を選択したカテゴリー (孫の誕生) と合わせた7項目がポジティブ感情を伴う出来事と特定された。同様に、ネガティブ感情を伴う出来事として、両親の死 [$\chi^2=102.08, df=3, p<.01$]、けんか [$\chi^2=36.57, df=3, p<.01$]、けがや病気 [$\chi^2=93.20, df=3, p<.01$]、他者の死 [$\chi^2=40.67, df=3, p<.01$]、家族や親戚の死 [$\chi^2=34.20, df=3, p<.01$]、配偶者の死 [$\chi^2=15.21, df=3, p<.01$]、挫折 [$\chi^2=7.12, df=3, p<.01$]、介護 [$\chi^2=5.44, df=3, p<.01$]、いじめ [$\chi^2=5.44, df=3, p<.01$]、事故 [$\chi^2=8.00, df=3, p<.01$] の10項目が特定された。両方の感情を伴う出来事として、就職 [$\chi^2=188.00, df=3, p<.01$]、大学受験 [$\chi^2=152.88, df=3, p<.01$]、高校受験 [$\chi^2=86.80, df=3, p<.01$]、部活動 [$\chi^2=14.22, df=3, p<.01$]、初潮 [$\chi^2=25.48, df=3, p<.01$]、子育て [$\chi^2=6.40, df=3, p<.01$]、子どもの自立 [$\chi^2=6.40, df=3, p<.01$]、引越しや転校 [$\chi^2=4.50, df=3, p<.01$]、中学受験 [$\chi^2=23.54, df=3, p<.01$] の9項目が特定された。どちらでもないの感情が有意に多く選択された特定されたカテゴリーはなかった。15項目は、2つ以上の感情を含むカテゴリーだった [例:ポジティブ感情と両方の感情 (恋愛、小学校入学など)]。

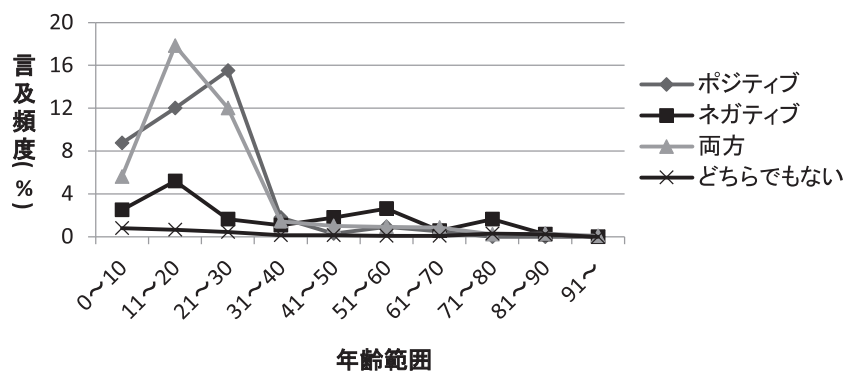


図1 記述された出来事の年齢と感情の関係 (大学生)

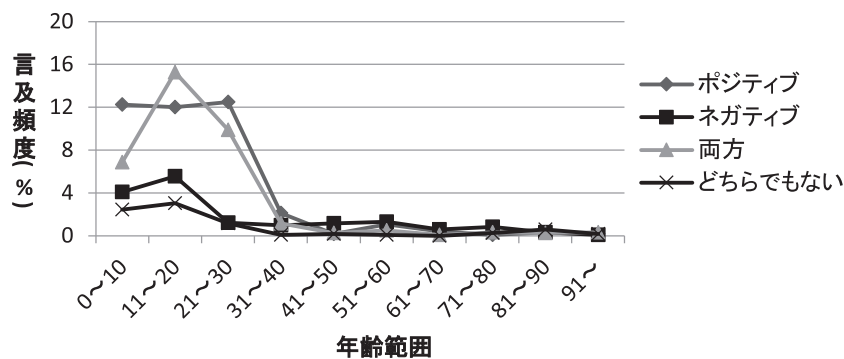


図2 記述された出来事の年齢と感情の関係 (中高生)

4. 考察

始めに、ライフスクリプトの主要な特徴と考えられている内容が、本研究内で形成されたライフスクリプトにも存在するのかどうかを検討する。中高生、大学生が記述した出来事のうち、ポジティブ感情を伴う出来事は全体の40%前後を占めていた。これは、先行研究の多くが70-90%の割合であることから、低い割合であると言える。また、ネガティブ感情、両方の感情を伴う出来事はそれぞれ17%前後と35-40%程であり、先行研究と比較して高い割合であった。さらに、本研究では、ポジティブ感情だけではなく、ネガティブ感情、両方の感情を伴う出来事の年齢分布にも特定の時期に山が見られた。特に、中高生、大学生ともに、11-20歳の時期に両方の感情において顕著な山が示された。また、ネガティブ感情を伴う出来事の年齢分布にも特定の時期に山が見られた。これらの結果を踏まえると、本研究ではライフスクリプトの主要な特徴が十分に示されたとは言えない。ライフスクリプト研究が一部の国でしか行われていないことから、ライフスクリプトに含まれる出来事の特徴は先行研究で対象となった文化圏（主に欧米圏）と日本では異なる可能性が示唆された。さらに、ライフスクリプトの主要な特徴と考えられている内容も普遍的なものではなく、文化や社会によって異なる可能性が示された。

ライフスクリプトに対する文化の影響

思春期でも成人期と同様に、文化を反映したライフスクリプトが形成されている可能性が示されている（Bohn & Berntsen, 2008）ことから、本研究の対象者が形成したライフスクリプトに対する文化の影響について上記の結果を踏まえ考察したい。本研究内のライフスクリプトと欧米文化圏のライフスクリプトとが異なっているかを調べるために、Berntsen & Rubin (2004) で作成されたライフスクリプト（35カテゴリー）との比較を行った。全カテゴリーのうち、本研究内のカテゴリーの大学生38.78%、中高生44.90%が先行研究の35カテゴリーと一致したが、大学生を対象とした先行研究の間では約60-85%近くが一致していることから（Bohn, 2010:78.79%; Bohn & Berntsen, 2008:64.29%; Erdoğan et al., 2008:62.96%; Rubin et al., 2009:83.33%）、かなり低い一致率といえる。特に、Erdoğan et al. (2008) はトルコ人大学生を調査対象としており、Berntsen & Rubin (2004) の対象者（デンマーク人大学生）とは異なる文化圏であったが、一致率は60%以上と高く、異なる文化圏でもある程度共通したライフスクリプトが形成される可能性が示されていた。しかし、本研究では、形成されたカテゴリーの半数以上が、欧米圏でのライフスクリプトとは異なる内容であり、文化の影響が大きく現れた可能性が示唆された。日本人中高生と大学生に共通して含まれ、また、日本以外の先行研究の多くに含まれなかった出来事は、“高校受験”“けんか”“部活動”“七五三”“中学受験”であった。これらは日本の文化や教育制度を反映した日本独自の項目であると判断できる。特に“高校受験”は、本研究の対象となった中高生は私立の中高一貫校に在籍していたため、高校受験を全員経験しない状況であったが、上位項目に含まれる結果となった。異なる文化間でも特に上位項目は共通する可能性が高いことが指摘されていることから、“高校受験”と“けんか”は、特に、日本の特徴を反映した出来事であると考えられる。

さらに、全体の内容について詳細に検討すると、先行研究では、文化差として取り上げられる出来事の多くが宗教に関する内容であったが、本研究では、宗教に関する出来事は少なく、学校に関する出来事を多くライフスクリプトに含むという特徴が見られた。宗教は国によってある程度、共通した宗派が存在するものの、日本のように多くの宗派が混在している場合は、個人的な出来事と考えることもできる。しかし、学校に通うような教育を受けるといふ経験は、異なる文化圏でも、ほぼ全ての人が一度は経験すると考えられる。特に、ライフスクリプト研究の多くが欧米圏を調査対象としており、学校制度を含む教育制度も、欧米圏と日本ではかなり類似しているといえる。先進国（特に日本）では、児童期から思春期までは、学校は一日の大半を過ごす場所であり、同年代の子どもたちと共通の出来事を同じ時期に経験していく、集団生活の場といえる。日本の中高生や大学生が、学校に関する出来事を欧米圏の先行研究より多くライフスクリプトに含んだことは、“皆で共通して経験する”出来事をより意識したことから導かれた可能性が考えられる。

また、感情についても、欧米圏の多くの先行研究（e.g., Berntsen & Rubin, 2004; Bohn, 2010; Erdoğan et al., 2008; Rubin & Berntsen, 2003; Rubin et al., 2009）では、ポジティブ感情を含む出来事が多く含まれることが示されており、ネガティブ感情や複数の感情については、ライフスクリプトに含まれる割合が少ないと言われてき

た。しかし、本研究では、出来事の中にはポジティブ感情だけではなく、ネガティブ感情や複数の感情（ポジティブとネガティブ両方）と特定される出来事も多くあり、さらに、伴う感情を一つに特定することが困難な出来事も複数含まれた。これらの出来事は、学校に関する内容の出来事で多く見られた。ライフスクリプトに含まれた出来事の内容自体、日本人の中高生、大学生では学校に関する出来事の割合が高く、欧米圏とは異なる特徴として考えられたため、日本の中高生は“学校”を様々な感情を含む経験を得る、重要な場所であると認識している可能性が考えられる。これもまた、日本の教育や学校制度が海外とは異なる出来事の経験を子どもたちに提供していることを示唆し、日本において中高生や大学生が感じる学校という場、学校の中での経験の重要性が示されたともいえるだろう。

ライフスクリプトに対する年齢の影響

中高生と大学生が作成したライフスクリプトを基に、出来事の総数、総数のうち実年齢までの年齢に関する出来事の割合を算出し、比較した。出来事の総数は、大学生 ($M=9.19, SD=1.71$) のほうが中高生 ($M=8.20, SD=2.69$) よりも多かった [$t(313)=3.91, p<.001$]。また、大学生 ($M=.52, SD=.22$) のほうが中高生 ($M=.41, SD=.28$) よりも実年齢までの出来事を全体の回答の中で多く含んだ [$t(303)=3.89, p<.001$]。

中高生と大学生の典型性得点は、大学生のほうが中高生よりも有意に得点が高く、特異性得点は有意に低かった。Bohn (2010)、Bohn & Berntsen (2008) は、年齢が上がるにつれて、ライフスクリプトはより典型的なものになることを示した。本研究でも、中高生よりも大学生のほうが典型的なライフスクリプトを形成しており、年齢が上がるほど、ライフスクリプトは典型的なものになるという一貫した知見が示された。さらに、特異性得点について、Bohn (2010)、Bohn & Berntsen (2008) は、年齢が上がるにつれて、ライフスクリプトの特異性は低くなることを示した。本研究でも、中高生よりも大学生のほうが特異性の低いライフスクリプトを形成しており、年齢が上がるほど、ライフスクリプトは典型的なものになるという一貫した知見が示された。よって、欧米の先行研究と同様に、思春期から成人期初期にかけてライフスクリプトはより典型的なものへと発達する可能性が示唆された。

ただし、中高生と大学生のライフスクリプトの重なりを調べると、上位10カテゴリーのうち、8カテゴリーは共通しており、更に、上位5カテゴリーは内容も順位も全く同じであった。これは、成人と8年生のライフスクリプトを比較した先行研究 (Bohn & Berntsen, 2008) の結果、6/10 (3/5) カテゴリーのみが共通であることと比較すると、より類似のライフスクリプトが形成されたと言える。ライフスクリプトの発達過程については不明点も多く、異なる文化や男女の間で形成されるライフスクリプトに違いが見られることから、発達過程についても同一だとは考えにくい。ライフスクリプトは主に思春期から成人期にかけて発達すると考えられているが、Bohn & Berntsen (2008) に比べて本研究内の中高生が大学生により類似しているライフスクリプトを形成していた。よって、日本人女子のライフスクリプトは先行研究で指摘されている成人期初期以降よりも少し早い時期に十分な形成ができるようになる可能性が示唆されたと言える。

本研究は、日本人女子中高生と日本人女子大学生を対象に、調べる限り、初めて実施されたライフスクリプトに関する質問紙調査であると考えられる。ライフスクリプトは文化の影響を受けると考えられており、日本人に特有である可能性の高い内容や特徴も見られた。今後は、異なる年代や性別への調査を実施することで、日本人が形成するライフスクリプトの特徴について明らかにする必要があるだろう。また、本研究で対象となった中高生は中学受験を経験しており、調査時には私立の中高一貫校に通っていた。ライフスクリプトを形成する際に自身の経験が影響する可能性が示唆されている (Bohn & Berntsen, 2008; Tekcan et al., 2012) ことから、今後は公立の中学校、高校に通う中学生、高校生を対象にした調査を行い、自身の経験とライフスクリプトの関係性についても検討を行っていききたい。

【引用文献一覧】

- Berntsen, D., & Rubin, D. C. (2002). Emotionally charged autobiographical memories across the life span: The recall of happy, sad, traumatic, and involuntary memories. *Psychology and Aging*, 17, 636-652.
- Berntsen, D., & Rubin, D. C. (2004). Cultural life scripts structure recall from autobiographical memory. *Memory & Cognition*, 32, 427-

442.

- Bohn, A. (2010). Generational differences in cultural life scripts and life story memories of younger and older adults. *Applied Cognitive Psychology*, 24, 1324-1345.
- Bohn, A., & Berntsen, D. (2008). Life story development in childhood: The development of life story abilities and the acquisition of cultural life scripts from late middle childhood to adolescence. *Developmental Psychology*, 44, 1135-1147.
- Coleman, J. T. (2014). Examining the Life Script of African-Americans: A Test of the Cultural Life Script. *Applied Cognitive Psychology*, 28, 419-426.
- Erdoğan, A., Baran, B., Avlar, B., Taş, A. Ç., & Tekcan, A. İ. (2008). On the persistence of positive events in life scripts. *Applied Cognitive Psychology*, 22, 95-112.
- Habermas, T. (2007). How to tell a life: The development of the cultural concept of biography. *Journal of Cognition and Development*, 8, 1-31.
- Habermas, T., & Bluck, S. (2000). Getting a life: The emergence of the life story in adolescence. *Psychological Bulletin*, 126, 748-769.
- Habermas, T., & Paha, C. (2001). The development of coherence in adolescents' life narratives. *Narrative Inquiry*, 11, 35-54.
- Janssen, S. M. J., & Haque, S. (2018). The transmission and stability of cultural life scripts: a cross-cultural study. *Memory*, 26, 131-143.
- Janssen, S. M. J., & Rubin, D. C. (2011). Age effects in cultural life scripts. *Applied Cognitive Psychology*, 25, 291-298.
- Janssen, S. M. J., Uemiya, A., & Naka, M. (2014). Age and gender effects in the cultural life script of Japanese adults. *Journal of Cognitive Psychology*, 26, 307-321.
- 小坂千秋・柏木恵子 (2007). 育児期女性の就労継続・退職を規定する要因. 発達心理学研究, 18, 45-54.
- Ottson, C. L., & Berntsen, D. (2014). The cultural life script of Qatar and across cultures: Effects of gender and religion. *Memory*, 22, 390-407.
- Rubin, D. C., & Berntsen, D. (2003). Life scripts help to maintain autobiographical memories of highly positive, but not highly negative, events. *Memory & Cognition*, 31, 1-14.
- Rubin, D. C., Berntsen, D., & Hutson, M. (2009). The normative and the personal life: Individual differences in life scripts and life story events among U.S.A. and Danish undergraduates. *Memory*, 17, 54-68.
- Scherman, A. Z., Salgado, S., Shao, Z. & Berntsen, D. (2017). Life Script Events and Autobiographical Memories of Important life Story Events in Mexico, Greenland, China, and Denmark. *Memory & Cognition*, 6, 60-73.
- Tekcan, A. İ., Kaya-Kizilöz, B. & Odaman, H. (2012). Life scripts across age groups: A comparison of adolescents, young adults, and older adults. *Memory*, 20, 836-847.

